

# フィリピンの黄色トウモロコシ生産と流通

野 沢 勝 美

今日アジア途上国における農業開発課題は、農業多角化による農家所得増大である。しかるに東南アジアに位置するフィリピンは、タイなどに比較し農業多角化が遅れをとってきた。しかし、近年は黄色トウモロコシ増産計画が進行している。本稿は、その黄色トウモロコシの生産と流通の現況と課題を述べる。

## 主要生産地がルソン島に移動

黄色トウモロコシは豚、鶏など畜産飼料用に生産されるもので、国内外の畜産振興に伴い需要が増大する。このため種苗会社などによる改良種子を利用した生産拡大が展開されてきた。黄色トウモロコシ改良品種はハイブリッド種であり、高投入・高産出をもたらす。その栽培技術、営農資金の提供といった体系的な生産システムが構築されてきた。政府にとってはコメ以外の作物生産による農家収入増大を企図した農業近代化政策の展開を意味する。

フィリピンにおいて農業多角化の導入はマルコス政権下の一九七〇年代半ばで、一九八一年に至り黄色トウモロコシ増産計画の「マイサガナ」が発足した。主要生産地は国内移住の拠点となったミンダナオ島が担った。

しかし近年は生産地がルソン島に移動している。二〇〇五年の生産推計では全国の黄色トウモロコシ生産は三〇〇万トンで、地域別でルソン島は一四七万トン、ミンダナオ島は一三九万トン、ビサヤ諸島は一六万トンである。

さらなる大きな問題は、地域ごとに需給比率が大きく異なる点である。全国では需給比率六三・四％と生産不足分を輸入に依存している。しかしミンダナオ島では需給比率は一〇二・三％で、最大の消費地ルソン島では同五九・四％となっている(表)。

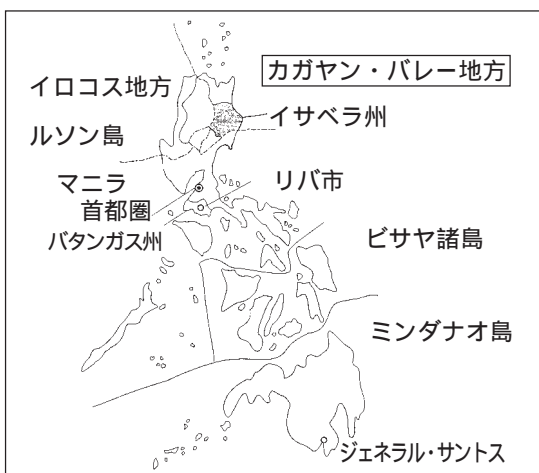
国内需要の増大に見合った生産をミンダナオ島において行えば、ルソン島での不足分をおぎなえるはずである。ところがミンダナオ島の積出港ジェネラル・サントスから首都圏近郊までの海上輸送コストが高く、ルソン島内で生産し陸路輸送したほうが経済的なのである。最終需要家は飼料生産工場である。流通経路の合理化を前提とした産地形成が進行したのである。かくしてルソン島での契約栽培の農家動員による黄色トウモロコシ生産がはかられた(地図)。

産の二三・八％に達する。カガヤン・バレー地方が「コーン・ランド」とよばれる所以である。なかでもイサベラ州は四八・〇万トンを生産し、同州だけで全国の一六・〇％と全国一の生産州である。これに対し食用の白色トウモロコシ生産は、カガヤン・バレー地方では二・四万トンと全国生産の二・四％に過ぎない。同地方の黄色トウモロコシ生産への傾斜が確認される。

## 農家生産高にバラツキ

イサベラ州における黄色トウモロコシ生産農家に聞き取り調査を行ったがその結果判明した事実は次ぎの四点である。第一に、生産農家における農地規模の零細性である。平均面積で一・〇ヘクタールから二・〇ヘクタールであった。これは同州は隣接するイロコス地方からの流入

(地図) フィリピン全図



(表) フィリピンの地域別黄色トウモロコシ需給推計 (2005年)

地域	生産 (トン)	需要 (トン)	生産/需要 (%)
ルソン島	1,466,750	2,435,535	59.4
ビサヤ諸島	163,225	946,910	17.2
ミンダナオ島	1,391,568	1,360,478	102.3
全国	3,001,543	4,742,923	63.4

(出所) Bureau of Agricultural Statistics.

第三に、黄色トウモロコシとコメの純所得を比較すると、雨期、乾期ともコメの方が若干ではあるが多かつた。したがってコメからト

移民による丘陵地の開拓に起因する。一部農家ではコメ生産も行っているが、その場合の作付面積は黄色トウモロコシの方が大きかった。  
 第二に、農地保有では自作農が多いが、小作農も混在する。後者の例では定率小作で地代は二五%、定額小作では一ヘクタール当り四五〇キロ(平均収量の約一〇%)である。  
 第三に、調査対象農家のすべてがハイブリッド種子を導入し種子会社、あるいはその代理店の技術指導を受けているものの収量ではバラツキがある。平均では一ヘクタール当り単収で五・〇トンであるが、最小では三・五トンであった。生産性にかかる差が生じた要因は、定期的な海外送金、投入財借入、小作料負担にあった。農業外収入の存在は生産意欲を減退させる。

ウモロコシへの作付転換はなかつた。

協同組合結成と物流施設不足

黄色トウモロコシに対する国内需要の急増を受け一九九一年以降に生産農家協同組合が結成されてきた。この結成奨励に動いたのは政府金融機関のフィリピン土地銀行であった。土地銀行は融資先であるバタンガス州リバ市所在の飼料生産販売協同組合への安定的原料供給を図るべく、イサベラ州の生産農家に協同組合結成を促した(写真)。つまり、契約栽培と抱合せで生産農家に営農資金貸付、営農技術指導を行った。協同組合への聞き取り調査によると次ぎの点が明らかになった。第一に、協同組合員には契約栽培を実施している組合員と、そうでないものが混在し、必ずしも統制はとれてない点である。組合員であっても条件を総合的に判断し仲買人に売渡す「良いとこどり」が横行している。

第二に、協同組合は黄色トウモロコシ生産以外にもコメ生産農家を構成員としている点である。また、当初黄色トウモロコシから発足した協同組合もコメ買付事業に着手するなど構成員多様化をはかり安定的組合運営に配慮している。  
 第三に、協同組合の組織形態は多目的協同組合でありその事業は多岐にわたっている。重要事業は黄色トウモロコシの買付事業であり、また組員への生産融資も一般的である。なかにはガソリンスタンド経営をしている組合もあった。多角的な事業展開からの収入源の確保で、各協同組合では資本形成が順調に増加している。第四に、協同組合活動にとって基本的、かつ

イサベラ州の多目的協同組合全景



(筆者撮影)

決定的な課題はインフラ設置の不足である。機械乾燥施設、大型輸送トラックの欠如は、これらを備えた地元仲買人による黄色トウモロコシの流通支配を許してきたのである。  
 以上のように、協同組合本来の機能である生産物の売渡価格、投入財・サービス価格において有利となる交渉力付与に関しては緒についたばかりといえる。一方、流通で優位にたった仲買人にとっても、同業者の競合による市場原理が支配している。ここへの参入には大型輸送トラックと顧客情報の把握が不可欠である。協同組合が見習う点はまさにここにある。  
 (のざわかつみ・国際関係学部教授)